醜女鍾離春の物語

――雑劇「鍾離春智勇定齊」と鼓詞『英烈春秋』――

田村彩子

はじめに

春秋戰國時代を題材とした一連の歴史物語は、書物や藝能などを通して、古くから人々に親しまれてきた。『全相平話』から清代の藝能・小説、そして現代の芝居に至るまで、さまざまな作品が殘されている。近年、貴重な藝能のテキストも、影印本やインターネット上で閲覧が可能になり、容易に見られるようになってきた。しかし、春秋戰國時代を題材とした物語については、多様な資料が殘されているにも關わらず、これまで十分に研究されてきたとは言えない。これらの作品の關係を整理し、發展過程を明らかにすることは、『三國志演義』などの歴史小説や、歴史上の人物を主人公とするが史實とはかけ離れた、英雄傳奇的な物語の成立に關する問題を考える上でも有益であろう。

春秋戰國時代を題材とした歴史物語の一つに、醜女鍾離春の物語がある。彼女の物語は『史記』や『戰國策』等の史書には見られないが、劉向の『列女傳』（いわゆる『古列女傳』。以下、單に『列女傳』とする場合はこれを指す）辯通傳「齊鍾離春」に收錄されている。そのあらすじは次の通りである。

鍾離春はとても醜く、四十歳になっても獨身であった。ある日彼女は「後宮の掃除係にしてください。」と、齊の宣王の所へ出かけていく。宣王は、鍾離春はなぞなぞが得意であると聞き、さっそく出題させてみるが、解くことができない。答えを尋ねると、それは宣王の政道に對する諫言だった。宣王は自らの誤りを悟って政道を正し、鍾離春を正妻に迎えた。こうして齊は鍾離春のおかげで平安になった。

この物語を題材とした雜劇に「鍾離春智勇定齊」がある。ここでまずその内容を紹介し、『列女傳』と比較してみよう。

齊の公子（本來は齊王）は、夢のお告げを受け、上大夫の晏嬰とともに狩りに出かける。そこで矢を受けたまま逃げる白兎を追って、一人の桑摘み女と出會う。彼女は鍾離春といい、容貌は醜いが、文武に優れた人物であった。晏嬰は彼女との問答でこれこそ夢のお告げの人物であると思い、公子に娶るよう勸める。鍾離春は車への同乘を斷り、まず結納を受けてから、改めて正室に迎えられる。

そののち、秦と燕から齊に使者がやって來る。秦からは玉の連

環を解けという難題が、燕からは蒲の琴を鳴らせという難題が持ちかけられるが、鍾離春の知恵でどちらも解決し、使者に刺青を入れて追い返す。怒った秦の秦姫輦と燕の孫操は、魏の吳起とともに齊を攻めるが、鍾離春の武勇の前に敗北する。戰は終わり、齊は上邦となる。

鍾離春が醜いこと、齊王の后になることなど、大枠は『列女傳』と同じだが、細部はかなり異なっている。特に後半は、鍾離春が聰明さだけでなく武勇も兼ね備えていることになっており、大きく異なる。この物語は、非常に荒唐無稽に思われるが、實は現代の京劇や地方劇にも同様のものが殘っている。[1]

鍾離春の物語には、どのような起源があり、どのように流布し、變容していったのか。その背景には何があるのか。本稿では、ほとんど文字テキストとして殘らなかった歷史物語について、現存する資料をもとに考察を試みたい。なお、中國の歷史小說において藝能と小說との關係は非常に密接であるため、本稿では小說や戲曲、その他の藝能など、さまざまな媒體で語られている歷史を扱った物語を「歷史物語」と總稱することにする。

一、雜劇「鍾離春智勇定齊」

先に內容を紹介した雜劇「鍾離春智勇定齊」のテキストは、現在見ることができるのは脈望館抄本のみであり、刊本は現存していない。脈望館抄本は、趙琦美が萬曆四十～四十五（一六一二～一七）年ごろに抄寫したものとされる。その中には「內本」と注記され、卷末に穿關（登場人物の扮裝を記したもの）を伴うものを多く含む。これは明の宮廷で上演するためのテキスト（以下、內府本と稱する）であったと考えられる。內府本は行事のために次々と作られ、一度上演されると使い捨てのようにされていたらしい。[2] また、皇帝や皇族が觀劇することを想定しているため、觀劇している人物への謝辭や祝辭を插入したり、本來は帝王の役回りであったものを、公子など別の人物に變えたりする例がしばしば見られる。「鍾離春智勇定齊」は、內府本と明記されてはいないが、穿關があることや、本來は齊王であるべき役が齊の公子となっていることから、おそらく內府本であろうと思われる。

「鍾離春智勇定齊」の作者は通常、鄭德輝と言われている。『錄鬼簿』には、鄭德輝の作として「醜齊后無鹽破連環」という作品の名が擧げられており、また『太和正音譜』にも鄭德輝の作として「無鹽破環」の名が見える。脈望館抄本「鍾離春智勇定齊」のタイトルの下には「『太和正音』作『無鹽破環』」の文字が見られ、これを書きこんだ人物（趙琦美か）が兩者を同一視していたことが分かる。しかし、『元明北雜劇總目考略』[3]に「脈望館鈔本の『鍾離春智勇定齊』を、趙琦美は『無鹽破環』と同じであると考えていたようだが、根據がなく、その考えには從えない」[4]と指摘があるように、「鍾離春智勇定齊」はおそらく鄭德輝の作ではないと思われる。鄭德輝の作品は、『太和正音譜』でも「その言葉遣いは非凡であり、咳と唾が九天に落ち、風によって珠玉を生じるかのようである。まことに傑作である」[5]と評されるように、典故や修辭に凝った、洗練されたものである。しかし「鍾離春智勇定齊」の曲辭は、一讀して意味が分かるほどに平明なものであり、作風が異なる。現存する「鍾離春智勇定齊」は、もとになった話が他にあった可能性はあるが、明代に宮廷での上演のために製作されたものであろう。

さて、先にも述べたように、雜劇「鍾離春智勇定齊」は劉向の『列女傳』

辯通傳にある「齊鍾離春」に見られる物語を題材としていると考えられるが、嚴密には、これとほぼ同内容の話が、同じく劉向編とされる『新序』にも採錄されている。『新序』では「鍾離春」という名前は登場せず、「無鹽女」「無鹽君」と呼ばれている。この他、『列女傳』では鍾離春が四十歳まで獨身であったとしているところを三十歳とするなど、細部には若干の差異が見られるが、おおむね『列女傳』と同内容である。『列女傳』には頌と圖が伴っていたとされ[6]、「齊鍾離春」の頌には「鍾離春」という名は見られず、『新序』と同様に「無鹽女」「無鹽君」としている[7]。『新序』は、『列女傳』『說苑』と同様の話を收錄するものの、あまり細かい分類が爲されておらず、『列女傳』『說苑』の前段階のものであろうと言われている[8]。「無鹽女」「無鹽君」の方が本來の、人口に膾炙した呼稱であった可能性が高いが、本稿では、雜劇のタイトルにもなっている「鍾離春」という名稱を用いることとし、『新序』と『列女傳』に見られる鍾離春の物語については、特に斷りのない限り『列女傳』「齊鍾離春」のものとして扱う。

さて、『列女傳』「齊鍾離春」と雜劇「鍾離春智勇定齊」とで大きく異なるのは、主に次の二點である。

①前半の桑畑での出會い　②後半の謎解きや合戰

いずれも『列女傳』の鍾離春の物語には見られない話であり、作者による創作か、あるいは他に起源があることが想定される。まずはそれぞれについて詳しく見てゆこう。

①桑畑での出會い

雜劇「鍾離春智勇定齊」に見られる「白兎を追う」「桑畑で男女が出會う」「男女のかけ合い」というモチーフは、金文京氏が「劉知遠の物語[9]」で指摘している、說話の類型と一致する。白兎を追って男女が出會うといえば、四大南戲の一つとして有名な『白兎記』が想起される。雜劇「鍾離春智勇定齊」がその影響を受けている可能性も十分にあるが、兩者の間に明らかな文章の一致は見られなかった。「桑畑での出會い」は古來より使われているモチーフであり、「鍾離春智勇定齊」雜劇もまた、その類型の一つであると思われる。

鍾離春が桑畑で齊王と出會う話は、現在でも京劇や地方劇に殘っている。『京劇劇目辭典[10]』によれば、この話は『列女傳』辯通傳の「齊宿瘤女」に基づいているという。實際に雜劇の本文と『列女傳』「齊宿瘤女」を比較してみよう。なお、對應箇所を分かりやすくするため、同一の文字を太字で表した。

・『列女傳』辯通傳「齊宿瘤女」

王大悅之曰「此**賢女**也。」命後乘載之。女曰「賴大王之力、父母在內。使妾不受父母之敎、而隨大王、**是奔女也**。大王又安用之。」王大慙曰、「寡人失之。」

王は大いに喜んで「これはよくできた女である。」と言い、命じて後ろの車に乘せようとした。女は「大王さまのお力のおかげで、家には父母がおります。わたくしに父母の教えに從わず、大王さまのお供をするようにとの仰せならば、それは驅け落ち女でございます。大王さまともあろうお方が、どうしてそのようなことをなさるのでしょう。」と言った。王は大いに羞じて言った。「わしが間違っていた。」と。

・「鍾離春智勇定齊」雜劇　第二折

［公子云］晏大夫、就着**賢女**跟同回去。異日與他父母處行禮如何。

［晏嬰云］小官與賢女說去。賢女、如今公子將賢女車車載着同回、異日與你父母行禮、擇吉日良辰、成親如何。［正旦云］此非禮也。既要結親、迎禮於鍾氏之門、擇吉日良時、親迎過門、此其禮也。若是同車車載回、**是爲奔女也**。［公子聽科云］晏大夫、此言深有理也。

［公子セリフ］晏大夫、それでは賢女も一緒に歸るようにさせよう。日を改めて彼女の兩親の所へ挨拶に行くということではどうか。［晏嬰セリフ］私が賢女に傳えに行って參ります。賢女よ、今公子はあなたを車に乘せてともに歸り、日を改めてあなたのご兩親の所へ挨拶に行き、吉日良時を選んで結婚をしたいとお考えだが、どうか。［正旦セリフ］これは禮にかなわぬこと。緣組みをしたいというのなら、鍾氏の門を叩いて迎える禮を行い、吉日良時を選んで、自ら迎えに來て結婚する、これが禮というものでございます。もし車に同乘して宮殿へ歸れば、それは驅け落ち女でございます。［公子は聞く仕草をして言う］晏大夫、この言葉はまことにもっともであるな。

このように、全くの同文ではないが、ほぼ同じ內容である。しかし、雜劇の作者が『列女傳』「齊宿瘤女」そのものに基づいて、桑畑での出會いの部分を書いたかどうかは疑問である。少なくとも鍾離春と宿瘤を同一の人物とする見方は、かなり古い段階からあったようで、これについては淸末の『列女傳』の注に興味深い指摘がある。

・蕭道管『列女傳集注』[11]辯通傳　齊鍾離春　注

曹云く、『水經』汶水注に「西に流れてゆくと無鹽縣の故城があり、その南がかつての宿國である。齊の宣后の故邑。いわゆる無鹽の醜女である。」とある。『元和郡縣志』鄆州須昌縣と、『太平寰宇記』鄆州須昌縣にはともに、「無鹽故城は縣の東三十六里にある。古の宿國である。『列女傳』の無鹽醜女は、名を宿瘤といい、この縣の女である。」と記載がある。鍾離春は宿國の女で、しかも瘤があるので、宿瘤と稱したということのようだ。『史通』雜說編には「宿瘤は隱形で齊王に要求し、后となった。」とある。どちらも誤って無鹽と宿瘤を混同している。『列女傳』では、無鹽は無鹽でしかなく、宿瘤は宿瘤でしかない。思うに無鹽が宿國の地名である上に、また『鍾離春傳』の次が『宿瘤傳』なのが原因で、誤っただけなのだろう。[12]

『元和郡縣志』『史通』は唐代の書物、『太平寰宇記』は宋代の書物であり、かなり早い段階から無鹽（鍾離春）と宿瘤を同一人物とする見方があったことが分かる。これが、右の指摘のように、誤った混同によるものなのか、それとも物語の融合や分離といった變化の中で、別人になったり一人に統合されたりした結果なのかは、檢討の餘地があるように思われる。なお、この桑畑の物語に關する記述は、別の雜劇にも見られる。元の白樸の「裴少俊墻頭馬上」雜劇第三折には、以下のような白（せりふ）がある。

昔、無艷（鹽）は田舍の野原で桑を摘んでいて、齊王が車で通りかかったときに出會い、王は娶って車に乘せようとした。しかし無艷（鹽）は言った。「いけません。父母に知らせて、それから初めて結婚できるのです。父母に會わないのは、驅け落ちです。」[13]と。

「裴少俊墻頭馬上」雜劇のテキストには『古名家雜劇』、『元曲選』、『柳枝集』があるが、この部分はほぼ同文である。[14]ただ、『古名家雜劇』と『柳枝集』では無鹽を「無艷」と表記しており、『元曲選』のみ「無鹽」としている。『元曲選』は『列女傳』に基づき、これを改めたも

のと思われる。無鹽を「無艶」とする表記は清代の鼓詞『英烈春秋』にも多く見られ、一般にはこの表記がある程度定着し、繼承されていた可能性もある。鼓詞『英烈春秋』や、物語の繼承などについては、三章で詳しく檢討することにしたい。

さて、右に引用した例は白の部分であるため、後に插入された可能性も全くないわけではないが、「裴少俊墻頭馬上」が、明の内府本と思われる「鍾離春智勇定齊」に基づいて書かれたとは考えにくい。したがって、鍾離春が桑畑で齊王と出會う話は、男女の出會いの類型の一つとして、當時ある程度知られていたものと思われる。

②謎解きと合戰

後半の謎解きと合戰の話は、『戰國策』齊六に基づくとされている[15]。以下に該當箇所を引用する。

秦始皇（鮑本では昭王）嘗使使者遺君王后玉連環曰「齊多知、而解此環不。」君王后以示羣臣、羣臣不知解。君王后引椎、椎破之、謝秦使曰。「謹以解矣。」

秦の始皇帝（昭王）は使者を使わし、君王后（太史敫の娘、襄王の后）に玉の連環を贈り、「齊には賢い者が多いそうだが、この環が解けるか。」と言ってきた。君王后は群臣に見せたが、誰も外し方を知らなかった。君王后はつちを手に取り、玉の連環をたたき割って、秦の使者にあいさつして言った。「謹んでお解きいたしました。」と。

肝腎の女主人公が、鍾離春ではなく君王后であったり、難題を持ちかける相手が異なったりしているが、この話が原據となっていることはほぼ間違いないだろう。しかし、やはり雜劇の作者が直接『戰國策』を見たかどうかは疑問である。例えば、初等教育の教科書にも用いられた『蒙求』には「齊后破環・謝女解圍」とあり、ただ「齊后」としか書かれていないため、鍾離春との混同が起こりやすいようにも思われる。またその注（『蒙求集注』）では、戰國策からこの話を引用している。このように、玉連環の話は、より通俗的なものを介して流入した可能性も考えられる。ともあれ、直接か間接かという違いがあったとしても、この話の原據は『戰國策』であろう。しかし、後半の謎解きと合戰の部分には依然として問題が殘っている。燕將として登場する孫操や、秦の秦姬葦、さらに最後に合戰に加わる吳起は、一體どこからやって來たのだろうか。孫操や秦姬葦は史書に名前が見られず、架空の人物のようだが、彼らは「鍾離春智勇定齊」のために作られた人物なのだろうか。また、歷史上の人物である吳起や晏嬰は、齊の宣王の時代よりも前の時代に活躍した人々である。彼らが登場するのは史實に合わず、史書を參考にしたとは思えない。彼らの來源については、鍾離春の物語の流傳について考える上で重要な鍵となるため、四章で詳しく考察することにしたい。

以上見てきたように、雜劇「鍾離春智勇定齊」に見られる物語は、三人の齊の王后の話を起源としているが、直接何らかのテキストに依據して作られたというよりも、傳承のような形で形成されたものではないかと思われる。本來鍾離春は、『列女傳』の「辯通傳」に分類されていることからも分かるように、辯舌やその知性が評價の對象だったはずである。しかし、雜劇「鍾離春智勇定齊」における鍾離春は、複數のエピソードを取り込むことにより、容姿は醜いが美德や知性を兼ね備え、合戰の場面では武勇を示す、「智勇」兼備のスーパーヒロインとなっている。

二、白話小說における鍾離春

さて、雜劇「鍾離春智勇定齊」の鍾離春は智勇に優れた人物として描かれていたが、文言の世界ではどうだろうか。先にも述べたように、『史記』や『戰國策』など史書の類には、「鍾離春」または「無鹽女」の物語は見られない。劉向の『列女傳』を除くと、古いものでは『論衡』と『前漢紀』に鍾離春に關する記述が見られるが、いずれも容姿が醜いが美點もある女性の例として名前が登場する程度である。[16]『蒙求』の注にも鍾離春の話は見られるが、これも『列女傳』を引いているにすぎない。その他の詩や文においても狀況は基本的に同じで、文言の世界においては、鍾離春の性格は原則として『列女傳』に基づくものであり、桑畑で齊王と出會ったという記述も、謎解きや合戰で智勇を示したという記述も、ほとんど見られない。[17]

では、明代に盛んに出版されるようになった白話小說ではどうだろうか。鍾離春の物語が描かれている白話小說には、以下の作品がある。

・『列國志傳』

殷の滅亡から始皇帝の天下統一までを描く歷史小說。『全相平話』にある物語と、歷史書の內容を繫ぎ合わせたような作品であり、[18]鍾離春の物語は「無鹽女獻策爲皇后」の部分に見られる。

現存する中で最も古い版本は、萬曆三十四（一六〇六）年序のある、福建の余象斗本。大塚秀高氏の「講史小說の出版と改變――『列國志』をめぐって――」[19]によると、蘇州の刊本である朱篁本の方が余象斗本よりも古い形に近いという。ただ、いずれの版本もテキストの內容に大きな違いはない。今回は余象斗本（上海古籍出版社『古本小說集成』所收、原本は蓬左文庫藏）を使用した。

・『新列國志』

周の東遷から始皇帝の天下統一までを描いており、殷の部分はない。『列國志傳』をより歷史に忠實に、かつ整った形に改作したもの。馮夢龍編とされ、成立は崇禎ごろと思われる。[20]今回使用したのは、上海古籍出版社『馮夢龍全集』所收、金閶葉敬池刊本。原本は內閣文庫所藏。現存する中では最も古いテキストである。

・『古今列女傳演義』

『列女傳』を白話に譯したもの。六卷からなり、劉向の『列女傳』と同樣の配列になっているが、七卷にあたる「孽嬖傳」（惡女の傳）は存在せず、『續列女傳』（宋代に『列女傳』が再編された際、本來の形とされるいわゆる『古列女傳』の後に附したもの）に收錄されている人物が、各卷に分散して載せられていたり、それ以外の人物も新たに加わったりしている。序に「東海猶龍子」とあるため、馮夢龍編のように思われるが、淸の康熙年閒の話も採られていることから、馮夢龍は編者ではないと指摘されている。[21]今回使用したテキストは、『列女傳彙編』（鄭曉霞、林佳鬱編、北京圖書館出版社、二〇〇七年）所收、首都圖書館藏本。

以上の三作品における鍾離春の物語は、いずれも『列女傳』「齊鍾離春」に因っている。それぞれに多少の脚色や表現の違いは見られるが、基本的にストーリーは同じであり、雜劇に見られた桑畑での出會いの場面や、玉連環の話は登場しない。また、『新列國志』と『古今列女傳演義』は、どちらも馮夢龍編と稱しているが、テキスト上に明

らかな一致は見られなかった。

それでは、鍾離春が桑畑で齊王と出會い、玉の連環をたたき割って勇を示す物語は、これらの本が出版されたころには、すでに失われていたのだろうか。宮廷用のテキストであり、抄本である脈望館抄本にのみ、この物語が殘ったということも十分に考えられる。そこで改めて『列國志傳』を見ると、本文ではないところに興味深い記述があることに氣づく。

・余象斗本『列國志傳』卷七　無鹽女獻策爲皇后　眉批

「無鹽乃縣名。（無鹽は縣名である。）」

「鍾離春、卽俗人言鍾無鹽是也。（鍾離春は、俗人のいうところの鍾無鹽のことである。）」

この眉批がついている部分の『列國志傳』本文には、「覆姓の鍾離、名は春」とあり、「俗人」たちが彼女の姓を「鍾」だと思っている、その誤りを正そうという姿勢が窺える。つまり、この『列國志傳』の眉批から、「俗人」の間では、鍾離春は「鍾・無鹽」として知られていたことが分かる。わざわざこのような注をつけているということは、鍾無鹽の名がある程度浸透していたことを示すと思われる。

實はこの「鍾無鹽」という名は、雜劇「鍾離春智勇定齊」にも登場する。嚴密には、雜劇「鍾離春智勇定齊」における鍾離春の呼稱は四種類あり、鍾離春（五例）・鍾無鹽（三例）・無鹽（四例）・無鹽女（十九例）である。「鍾離春」の用例は第一折と第二折のみであり、場面としては、鍾離春が齊の公子と出會い、后に迎えられるまでの部分である。例えば、第二折で正旦は「我姓鍾離名字春（私の姓は鍾離、名は春）」と唱っている。一方、「鍾無鹽」の用例は、第二折の次の楔子と、第三折に見られ、全て敵役の秦姫輩の白（せりふ）に登場するものである。數字の上では「鍾無鹽」の例は少ないように見えるが、第一折と第四折に登場する鍾離春の父と兄は、それぞれ「鍾大戶」、「鍾大」となっている。このように不自然な狀況が生じているのは、本來「鍾無鹽」であった所を、『列女傳』に基づいて「鍾離春」に改めたが、場所によっては原型が殘っているためと思われる。そして、「鍾無鹽」は、「鍾離春」と似て非なる人物であると考えられるのである。

雜劇「鍾離春智勇定齊」において、「鍾無鹽」の呼稱が用いられるのは、武勇の要素が強い後半に限られる。鍾離春の「勇」の要素は、もう一人の鍾離春ともいうべき「鍾無鹽」に屬するものではないかと思われ、「鍾無鹽」は、本來『列女傳』の鍾離春とは別の背景を持つキャラクターであったと思われる。雜劇「鍾離春智勇定齊」は、おそらく當時すでに存在した、「勇」の「鍾無鹽」の物語を取り込んで作られたのであろう。

『列國志傳』の眉批によれば、少なくともその眉批が書かれた頃には、「鍾無鹽」という名は「俗人」の間に浸透していたようである。あるいはそれは、雜劇「鍾離春智勇定齊」のような物語を通して廣まったものであるのかも知れない。

『列國志傳』がある程度の時代考證を行い、もとにした物語の史實と合わない箇所を削除・改變している點は、すでに先行研究に指摘のある通りである。[22] 鍾離春の物語の場合も、荒唐無稽な「鍾離春智勇定齊」物語のかわりに、『列女傳』の內容に差し替えた可能性を、全く否定することはできないだろう。白話小說の誕生はそれまでの、詩文では表現することが難しかった、通俗的な內容を描くことを可能にしたが、文字にして出版するという行爲には、ある程度の規範意識が働いていたはずである。鍾離春の物語を描いた白話小說は、『三國志演義』

やその他の歴史小説が辿ったのと同様に、合理化・歴史記述化へと向かっていったのかもしれない。

「勇」の「鍾無鹽」の要素を持った物語は、さらに時代を降った清代の藝能にも見られる。次に、清代の鼓詞『英烈春秋』を見てゆこう。

三、車王府本鼓詞『英烈春秋』

藝能における鍾離春の物語の例として、本稿では車王府本鼓詞『英烈春秋』を取り上げる。[23] 車王府本は、清代に北京の車王府によって收集されたといわれる、戯曲や藝能などの抄本のコレクションで、當時傳わっていた通俗的な物語を知ることのできる貴重な資料である。また鼓詞は、伴奏を伴い、韻文と敍述の部分を交互にくり返して語ってゆく藝能である。

『英烈春秋』は、鍾離春の活躍を描いた六十二卷百二十本に及ぶ長篇物語で、語りものの藝能のテキストによく見られるように、あて字や通用字が多用されている。また抄本であるため、讀み物として出版されたものとは性格を異にすると思われる。鼓詞『吳越春秋』の續編であり、孫臏と龐涓の戰いを描いた鼓詞『金盒春秋』、さらに樂毅と孫臏の戰いを描いた『走馬春秋』へと續く。以前に別稿で述べたが、鼓詞『走馬春秋』は、部分的に『全相平話』よりも古い内容を殘している可能性がある。[24] 同様に『英烈春秋』も、白話小説では語られなかったような、古い内容を留めている可能性が十分に考えられる。

そこで内容を見てみると、まず、女主人公の名は「鍾無鹽」である。「鹽」は、「艶」と表記されることが多く、白樸の「裴少俊墻頭馬上」雜劇に見られた表記と共通する。さて彼女は、本來は天界の仙女であったが、瑤池王母の怒りに觸れて下界へ落とされ、紫微星の下凡である齊の宣王が天下を治める手助けをし、天下を安んじた後に、再び天界へ戻るという設定になっている。このように、英雄を天界の星の化身とする設定は、通俗文藝によく見られるものであり、鼓詞『英烈春秋』もその類型であると思われる。

鼓詞『英烈春秋』の鍾離春は、仙術を操り、寶貝を使い、山賊を降して養子にし、敵國の王を投げ飛ばして殺すなど、その超人ぶりは雜劇よりも激しい。彼女の様子は、例えばこのように描かれている。

鍾國母坐在冷宮之內、心中暗想說「是昏君今日將我貶在冷宮、叫哀家受這一番苦楚、好不凄涼人也。」這娘娘前思後想、由不得心中傷感也舊痛哭起來。衆宮女見娘娘如此、一个个也都傷心落泪。[25]（中略）娘娘說「你等要吃飯、這有何難。你們暫且退後、哀家叫你們吃飯。」衆宮娥只得各自散去。天有起更之時、娘娘跕起身形來、至殿外、手內仗劍掐訣念咒、用手中的寶劍一指說道「功曹何在。」一言未盡、只見那四位功曹在雲中跕立…

鍾國母（鍾離春）は冷宮の中に座り、心の内に思うには、「ばかとのめが、今日は私を冷宮に追いやり、わらわをこんなふうに酷い目にあわせるとは、何と惨めなこと。」このお后さまは思い惱み、思わず悲痛な氣持ちになって、早くも泣き出してしまいました。宮女たちはお后さまがこんな様子なのを見ると、一人一人みな心を痛めて涙を流しました。（中略）お后さまは言いました。「そなたたちがご飯を食べたいなら、そんなのはたやすいことじゃ。そなたたち、暫く下がっておれ、わらわがそなたたちにご飯を食べさせてやろう。」そこで宮女たちはそれぞれ去っていきました。空が暗くなってくるころ、お后さまは身支度をすませ、立ち上がって冷宮の外にやってくると、手

に劍を持って祕密の呪文を唱え、劍で一指しして言いました。「いでよ、功曹。」その言葉も終わらぬうちに、見れば四人の功曹が、雲の中に立っておりました…（鼓詞『英烈春秋』巻九）

宮殿に上がったばかりのころ、鍾離春は宣王に迫害される。冷宮に追いやられた鍾離春は、自分に仕えている女官たちのために術を使い、宣王と側室の所からごちそうを頂戴してしまうのである。しかし、夫の宣王を昏君（ばかとの）と呼ぶなど、つつましく、夫に従順な女性のすることではない。鼓詞『英烈春秋』の鍾離春は、『列女傳』や、女性教育が手本として示すような女性の美徳とはかけ離れた言動をくり返す。白話小説が『列女傳』[26]に回帰していったのとは、異なる方向性を持っているように思われる。

このように、『英烈春秋』は、『列女傳』や雑劇などには見られなかったエピソードが全體の大半を占めているが、中には雑劇「鍾離春智勇定齊」と共通する話も含まれている。以下に示す表は、雑劇「鍾離春智勇定齊」と共通する話の有無を表したものである。参考までに、他の作品との異同も擧げておいた。○と×は同様の話の有無を示す。似て非なる場合は、異なる點を記した。

「鍾離春知雄定齊」雑劇	鼓詞『英烈春秋』	『列國志傳』	『新列國志』	『列女傳』齊宿瘤女	『列女傳』齊鍾離春
宣王（公子）が夢のおつげを受け、晏嬰に相談する	○（巻一）	×	×	×	×
狩りに出かける	○（巻一）	×	×	王、外出する	×
白ウサギに導かれ、出會う	○（巻一）	×	×	×	×
晏嬰、鍾離春を試す	×	×	×	×	×
齊王と問答する	○（巻一）	○	○	○	○
車に同乘することを斷る	×	×	×	○	×
結納する	○（巻一）	×	×	黄金を持って迎えに行かせる	×
秦姫輦は虎白長に玉環を持たせ齊に使わす	秦に赴いて玉環を解く（巻三十七）	×	×	×	×
孫操は孫倣に琴を持たせ齊に使わす	使者は子之（巻二）	×	×	×	×
鍾離春、難題を解決する	○（巻二、三十七）	×	×	×	×
秦、燕、魏の吳起が齊を攻める	個別に戰う。燕（巻二～五）魯の吳起（巻二十三～三十）秦（巻三十七～四十）	×	×	×	×
秦、燕、魏と合戰する	個別に戰う。燕（巻二～五）魯の吳起（巻二十三～三十）秦（巻三十七～四十）	×	×	×	×

敵は降參し、齊が上國となる	○（卷四十）	國境を安んじた	齊は大いに治まった	秦楚をも懼れさせ、帝號を立てた	齊は大いに平安になった

鼓詞『英烈春秋』には、雜劇「鍾離春智勇定齊」で語られる內容がほぼ全て含まれていると言ってよく、その他の作品に、これほどの一致は見られない。雜劇「鍾離春智勇定齊」のテキストである脈望館本は抄本であり、しかも宮中の上演用テキストであったと思われる。ならば、手輕に、かつ多くの人々の目に觸れるような物ではなかったはずであり、まして清代の鼓詞の作者が見たとは考えにくい。それにも關わらず、その內容が雜劇「鍾離春智勇定齊」と鼓詞『英烈春秋』で一致する、ということは、文字としてはほとんど殘っていないが、明から清ごろには民間で同樣の物語が流布していたと考えるべきであろう。兩者は、同樣の物語を源とし、それぞれ異なった段階で表面に現れたものなのではないだろうか。この物語が民間に傳わっていたと考えれば、白樸の「裴少俊墻頭馬上」雜劇と鼓詞『英烈春秋』において「無艶」という表記が一致することや、『列國志傳』に「俗人」の語る物語の誤りを指摘するような批評がついていたことも、說明できる。

四、民間傳承との關係

「鍾離春智勇定齊」雜劇に見られるような鍾離春の物語は、その他の民間傳承とも繫がりがあったと考えられる。その第一の根據として、「鍾離春智勇定齊」雜劇に登場する人物が伍子胥の「臨潼鬪寶」物語や『全相平話』、さらに『列國志傳』と共通するという點が擧げられる。

先にも述べたように、『列國志傳』は史書と民間傳承を繫ぎ合わせたような作品である。『新列國志』に改作された際に民間傳承的な物語は排除され、歷史的記述に回歸していったが、その點については馮夢龍自身が敍の中で次のように述べている。

秦の哀公の臨潼鬪寶の物語は長い間民間で語られ續けてきたが、そのあやまりはよりひどいものである。（中略）商鞅を任じて法を改正して、秦はようやく大きくなったのだから、哀公の世には秦はまだ小國だったはずだ。どうして號令して十七國の君を召し、一齊に臨潼に赴かせたりできただろうか。（中略）伍員を明輔とするなど卑俗の極みである。このようなうわごとは、田舍の田畑の畦に座って身振り手振りよろしく語り、農作業の眠氣覺ましをする程度のものだ。いささかでも文理に通じた者の言うようなことではない。[27]

ここで問題になっている「臨潼鬪寶」とは、秦の哀公が周王の名を借りて十七國の諸侯たちを集め、お寶比べをするという一連の物語である。史書の記述に沿わない荒唐無稽な話だが、民間ではよく知られていたようである。[28] この「臨潼鬪寶」物語に關する記述が、「鍾離春智勇定齊」雜劇にも見られるのである。

「鍾離春智勇定齊」雜劇では、秦姬輦が登場詩で「强秦雄霸占咸陽、鬪寶臨潼拱上邦（强秦は勇ましく咸陽の地を占め、臨潼の寶比べで上邦を拱く）」と唱える。秦姬輦は『列國志傳』や雜劇で語られる「臨潼鬪寶」物語に登場し、主人公の伍子胥と明輔の地位を爭う重要人物である。『列國志傳』には、この「臨潼鬪寶」物語の他にも、周の武王が殷の紂王を伐つ「武王伐紂」物語、孫臏と龐涓の知惠比べ「孫龐鬪智」物語、樂毅が齊を攻める「樂毅圖齊」物語などの『全相平話』に基づくと思われる民間傳承が取り入れられている。[29]

「鍾離春智勇定齊」雑劇と、その他の民間傳承で共通する登場人物は秦姫輦だけではない。「鍾離春智勇定齊」雑劇に燕將として登場する孫操は『全相平話』と『列國志傳』卷八の「樂毅圖齊」物語にも登場する。彼は孫臏の父という設定になっているが、史書にその名は見られず、民間傳承や藝能にのみ現れる架空の人物と思われる。また雑劇「鍾離春智勇定齊」には、實在はしたが、生沒年が宣王の治世とあわない晏嬰や吳起が登場する。彼らも孫操と同様に、『列國志傳』や雑劇に現れる。晏嬰は『列國志傳』卷五の「臨潼鬪寶」物語の部分に、吳起は「孫龐鬪智」物語を扱った雑劇「龐涓夜走馬陵道」に登場する。

このように、「鍾離春智勇定齊」雑劇の登場人物と『全相平話』や雑劇などに見られる人物は、架空のものであったり、歴史的に不自然であったりするにもかかわらず、共通している。したがって、物語もある程度の繼承關係にあると考えられるのではないだろうか。ここで擧げた登場人物の分布を表にしたものを、以下に示した。この表は、どの人物がどの話に登場するかを表している。登場しない場合は ×を、登場する場合は作品名を記した。

縱…人物　横…該當エピソード

	臨潼鬪寶	孫龐鬪智	樂毅圖齊
晏嬰	『列國志傳』	×	×
秦姫輦	『列國志傳』・楚昭王疎者下船雑劇	×	×
吳起（騎）	×	龐涓夜走馬陵道雑劇	×
孫操	×	『孫龐鬪志演義』	『平話』・『列國志傳』

ここに表された登場人物と時系列を考え合わせると、「鍾離春智勇定齊」は「臨潼鬪寶」と「孫龐鬪智」の間に位置すると思われる。

次に、第二の根據として、車王府本鼓詞の例を擧げたい。車王府本には一連の春秋戰國時代を題材とした鼓詞のシリーズがあるが、鍾離春の物語『英烈春秋』は、伍子胥の物語と孫臏の物語の間に位置し、兩者と繫がっている。『英烈春秋』では、後に活躍することになる孫臏の出生の祕密が語られ、その父である孫操や、兄弟たちも登場する。そしてその後『金盒春秋』→『走馬春秋』→『鋒劍春秋』と續いてゆく、一連の孫臏を主人公とした物語の出發點となっている。先にも述べたが、このうち『走馬春秋』は『全相平話』と同様の、場合によってはそれよりも古い內容の物語が含まれていると考えられる。この例を『英烈春秋』に當てはめれば、鍾離春の物語もまた、古くから『全相平話』や雑劇に見られるような、他の物語と繫がっていた可能性がある。

以上の二點を考え合わせると、鍾離春が桑畑で齊王と出會ったり、謎解きや合戰で活躍したりする物語は、伍子胥の「臨潼鬪寶」物語と、孫操の息子である孫臏の一連の活躍を描く物語の間の話として、ある程度流布していたように思われる。

おわりに

雑劇「鍾離春智勇定齊」における鍾離春の物語は、『列女傳』「齊鍾離春」に描かれるものと大きく異なっていた。その起源は、三人の齊の王妃の物語にあると思われるが、おそらく、雑劇の作者が『列女傳』や『戰國策』などのテキストに直接基づいて創作したのではなく、傳承のような形で形成されたのではないかと思われる。特に鍾離春の

「勇」の側面は、『列女傳』とは別の起源を持つもう一人の鍾離春ともいうべき「鍾無鹽」の性格であると思われる。

「勇」の側面を持ち、八面六臂の活躍をする鍾離春の物語は、清の鼓詞『英烈春秋』にも含まれていた。明の宮中の上演用テキストであったと思われる雜劇「鍾離春智勇定齊」を、清の鼓詞の作者が見て『英烈春秋』を書いたとは考えにくい。この物語は、白話小說や傳統詩文にはほとんど痕跡を殘していないが、少なくとも明（あるいは元）以降、民間に流布しており、現代まで傳わったものと考えられる。

この鍾離春の物語には、架空の人物と思われる孫操や、時代のあわない晏嬰などが登場し、一見歷史を無視した荒唐無稽な虛構にしか見えない。しかし、鼓詞『英烈春秋』や『全相平話』、雜劇などに見られる設定とは合致する。大膽な推測をすれば、この背後には正統な歷史とは異なる枠組みを持った、巨大な物語の體系が存在したのではないだろうか。鍾離春の物語は、おそらくその一部分にあたるものであろう。

※本稿は、平成二十三年度日本學術振興會科學研究費補助金（課題番號23・1043）の交付を受けた研究成果の一部である。

注

（1）『京劇劇目辭典』（曾白融主編、中國戲劇出版社、一九八九年）の「湘江會」（鍾離春の物語を描いた演目）の項に、以下のような解說がある。「此戲在舊時徽班中演唱頗盛、乃武二旦・刀馬旦之重頭戲。漢劇・徽劇・豫劇・同州梆子・河北梆子・弋陽腔有類此劇目（この劇はかつて徽班において盛んに演じられ、武二旦、刀馬旦（たちまわりをする女役）の技量が問われる演目とされた。漢劇・徽劇・豫劇・同州梆子・河北梆子・弋陽腔にこれと同類の劇目がある）」

（2）脈望館抄本については、小松謙『中國古典演劇研究』Ⅱ第三章「『脈望館抄古今雜劇』考」を參考にした。

（3）邵曾祺編著、中州古籍出版社、一九八五年。

（4）原文「脈望館抄本的『鍾離春智勇定齊』、趙琦美以爲卽是『無鹽破環』、但無根據、不從」

（5）原文「其詞出語不凡、若咳唾落乎九天、臨風而生珠玉。誠傑作也」

（6）『漢書』藝文志「劉向所序六十七篇、『新序』・『說苑』・『世說』・『列女傳頌圖』也」

（7）原文「無鹽之女、干說齊宣。分別四殆、稱國亂煩。宣王從之、四辟公門。遂立太子、拜無鹽君」

（8）中島みどり『列女傳』（東洋文庫、二〇〇一年）解說參照。

（9）『東方學』第六十二輯、一九八一年七月。

（10）注1所揭書。

（11）清・光緒十八年の蕭道管の序があるが、光緒三十年序によれば、その後さらに手を加えて出版されたようである。

（12）原文「曹云、『水經』汶水注「西流逕無鹽縣故城、南舊宿國也。齊宣后之故邑。所謂無鹽醜女也。」『元和郡縣志』鄆州須昌縣・『太平寰宇記』鄆州須昌縣竝云、「無鹽故城在縣東三十六里、古宿國也。『列女傳』無鹽醜女、名宿瘤、卽此縣女也。」似鍾離春以宿國女、而有瘤、故稱宿瘤。『史通』雜說編「宿瘤隱形干齊王而作后。」亦誤合無鹽宿瘤爲一面。『列女傳』則無鹽自無鹽、宿瘤自宿瘤也。蓋無鹽既宿國地、又與宿瘤傳相次、故因而致誤耳。」

（13）原文「昔日無艷採桑於村野、齊王車過見了、欲納爲後同車。而無艷曰『不可、稟知父母、方可成婚。不見父母、卽是私奔。』」

(14) 異同は以下の通り。
『元曲選』：「無艷」→「無鹽」、「于村野」→「於村野」。『柳枝集』は『古名家雜劇』と同じ。

(15) 玉連環の話が『戰國策』に基づくという點は、『古典戲曲存目彙考』（上海古籍出版社、一九七九年）「醜齊后無鹽破連環」、『元明北雜劇總目考略』（趙景深主編、邵曾祺編著、中州古籍出版社、一九八五年）「醜齊后無鹽破連環」などに指摘がある。

(16) 『論衡』卷一　逢遇篇
「或以醜面惡色、稱媚於上、嫫母・無鹽是也。嫫母進於黄帝、無鹽納於齊王（あるいは容貌が醜いのに、帝王から美點を讃えられた。嫫母・無鹽がそれである。嫫母は黄帝と結婚し、無鹽は齊王に迎えられた）」
『前漢紀』卷二十六　孝成三
「以計勝色者昌、以色勝計者亡。無鹽宿瘤、天下之醜女也。齊二君、以計勝色、立爲后。皆以折衝安國（はかりごとが容色に勝る者は榮え、容色がはかりごとに勝る者は亡ぶ。無鹽や宿瘤は、天下の醜女であるが、齊の二君は、（彼女たちの）はかりごとが好色に勝っているのを見て、妃に立てた。みなかけひきによって國家を安んじた）」

(17) 例外として、以下の詩がある。
邊貢「送周公度下第（周公度の下第するを送る）」
（前略）
君不見　齊無鹽　　ごらん、齊の無鹽を
今日椒房貴　　今日は后の位にあるが
昨日採桑女　　昨日は桑摘み女だった
又不見　商傳說　　また見てごらん、商の傅說を
朝辭版築暮霖雨　　朝に版築を辭し、夕に惠みの雨となった
人生窮達會有時　　人生はうまく行くも行かないも、時というものがあるのだと
世間俗子安得知　　世の俗人には分からないのだ
この詩は、弘治九（一四九六）年の進士で、前七子の一人にも數えられる邊貢の詩集『華泉集』に採錄されているものである。鍾離春が桑摘み女だったという表現が見られるが、このような例は一般的に傳統詩文には見られず、非常に珍しい。何らかの戲曲や藝能の影響を受けている可能性も考えられる。

(18) 『列國志傳』の成立と展開については、小松謙『中國歷史小說研究』（汲古書院、二〇〇一年）第一章「『列國志傳』の成立と展開――『全相平話』と歷史書の結合體――」參照。

(19) 『中國古典小說研究動態』第三號、一九八九年十二月。

(20) 正確な刊行年は不明だが、封面に書かれている宣傳の內容や、祁彪佳『祁忠敏公日記』の崇禎十七（一六四四）年の記述から、崇禎年間に刊行されたものと考えられる。『新列國志』の成立については、拙稿「『新列國志』成立考」（『中國古典小說研究』第十三號、二〇〇八年十二月）を參照されたい。

(21) 『中國古代小說總目』（山西教育出版社、二〇〇四年）白話卷「古今列女傳演義六卷一百一十則」參照。

(22) 『列國志傳』が時代考證を行っている點については、注18所揭論文に詳しい。

(23) 鍾離春の物語を扱った藝能作品は、車王府本では鼓詞以外に「某種戲詞」に分類されている『英烈春秋』や、亂彈「湘江會」がある。また、『俗文學叢刊』第三輯（新文豐出版、二〇〇一年）、第四二九册～第四三三册所收の南音『新刻鍾無艷娘娘全本』があるほか、同樣の物語を扱った淸代の藝能テキストは複數存在する。管見の限りでは、車王府本鼓詞『英烈春秋』が最も長編である。

(24) 詳しくは、拙稿「樂毅の物語――『走馬春秋』を手がかりに」（『中國古典小說研究』十六號、二〇一一年十二月）を參照されたい。

(25) 「舊」は「就」のあて字と見なし、「就」として譯した。

(26) 鍾離春の描かれ方の違いについては、張袁月「鍾無鹽故事的流變及文化意蘊」（『西華師範大學學報（哲學社會科學版）』、二〇一一年三月）に、雜劇や傳奇では、彼女がある程度、儒敎思想から外れた行爲をする、という指摘がある。張氏は『新序』『列女傳』『列國志傳』『東周列國志（『新列國志』と同一としている）』『古今列女傳演義』、雜劇（『無鹽破環』としている）、傳奇『湘江會』『中秋會』『無鹽拊膝』を比較し、小說はいずれも『列女傳』を敷衍したものだが、雜劇や『湘江會』などの傳奇はそれと異なる創作を多く含んでいる、としている。その理由は受容層の違いによるものとし、小說を讀むのは多くが「知識分子」であるのに對し、藝能を通じて受容するのは「一般民衆」が多く、その嗜好によるものと結論づけている。

(27) 原文「如秦哀公臨潼鬪寶一事、久已爲閭閻恆譚。而其紕繆乃更甚。（中略）任商鞅變法、而秦始大。然則哀公之世秦方式微。豈能號召十七國之君、竝駕而赴臨潼邪。（中略）至伍員爲明輔、尤屬鄙俚。此等囈語、但可坐三家村田塍上指手畫脚、醒鋤犂睡。未可爲稍通文理者道也」

(28) 「臨潼鬪寶」の話を扱った戲曲が殘っていることについては、注18所掲論文を參照されたい。また、『列國志』の版本の中には、封面に「臨潼鬪寶」の話が入っていることを賣りにした文句を書いている『新刻出像玉鼎列國志』（東京都立中央圖書館藏）のようなものもある。

(29) これらの物語と『全相平話』との關係については、注18所掲論文に詳しい。この四つの物語を史書の記述から特に大きく逸脫する部分とするのは、小松氏の論に基づくものである。なお、「孫龐鬪智」物語を描いた『全相平話』は現存していないが、その內容は『列國志傳』や『孫龐鬪志演義』に見られるような內容であると思われる。詳しくは拙稿「孫臏と龐涓の物語」（松村昂編著『明人とその文學』、汲古書院、二〇〇九年）、氏岡眞士「論《孫龐演義》與元代平話的關係」（『人文科學論集　文化コミュニケーション學科編』四十三號、二〇〇九年三月）參照。